Story4

桜島大噴火と埋没鳥居

国道から山手へ三百メートルほど登った小高い山の中腹辺りに稲荷神社はあります。

大正三年（１９１４）の大噴火で噴出した大量の火山灰は、上空約八千メートルまで上昇し、大規模な損壊を与えました。

高さ約三・五メートルあったという稲荷神社の鳥居ですが、今は笠木部分の約一・四五メートルを地上に見せるのみで、当時の大噴火の恐ろしさを今に伝えています。

※2ページに写真あり

写真左：稲荷神社　写真右：稲荷神社展望所からの景観

稲荷神社の創建

天正二年（１５７４）、牛根城（入船城）が落城し、安楽備前守兼寛より城明渡しを受けた島津義久は、部下の伊集院魯笑斉久道（いじゅういんろしょうさいひさみち）を牛根郷の地頭として納めさせました。

久道は民心をなだめ、島津の権勢を誇示するため、島津氏の氏神である稲荷神社を創建し、崇拝させたといわれています。また、伊集院久道が牛根城にあった荒神を合祀したともいわれています。

埋没鳥居

社の数段手前には、大正三年（１９１４）の桜島大噴火の降灰により埋没した「埋没鳥居」があります。現在、約一・四五メートルまで掘り出しており、鳥居の真ん中がきれいに割れて、ずれている形になっています。特徴的な形になっていますが、鳥居を担ぎ上げるのに重機がなく、人力で担ぎ上げるため、はじめから分かれていたものであったといいます。噴火の影響で鳥居の左右がずれてしまいましたが、百年以上経った今でも、鳥居の左右は落ちることなく繋がっています。